

### Jennie Gerhardtの父なる世界での苦闘

田村, 理香 / TAMURA, Rika

---

(出版者 / Publisher)

法政大学多摩論集編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Hosei University Tama bulletin / 法政大学多摩論集

(巻 / Volume)

30

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

15

(発行年 / Year)

2014-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00009611>

# *Jennie Gerhardt* の父なる世界での苦闘

田村理香

Theodore Dreiser の *Jennie Gerhardt* (1911) は、富と貧困が小説の構成に大きな影響を与えている点で、同じ作者による *Sister Carrie* (1900) と共通している。しかしその使われ方には大きな違いがある。*Sister Carrie* では、富を基準として主人公たちの上昇と下降が描かれ、彼らの動きによって物語が展開される。それに対し、*Jennie Gerhardt* では、金銭やモノの所有量や消費量は、身分や階級といった概念の中に取り込まれている。主人公は上流階級に属する男性の愛人になることで貧困からは脱却するが、小説の最後まで上流階級に属することはない。相手の男性も上流階級に留まったまま死ぬ。富や貧困は最初から枠組みとして機能し、動くことはないのである。その意味で *Jennie Gerhardt* は閉ざされた構造を持った作品ともいえる。本稿では、その閉ざされた構造の中で、作者 Dreiser がいかに登場人物たちを動かし、物語を展開させていったのかを考えていきたい。

## I .

*Jennie Gerhardt* において主人公 Jennie は上流階級の男性と結婚しそうになりながらできない。そしてその過程で次から次へと事件が起こる。そうした事件は、Jennie や周囲の人間たちに衝撃を与え、彼らの人生に波紋を呼び起こしながら、次の事件を呼び込んだり複雑化させたりする。その意味で、最初に Jennie に降りかかる出来事、Brander との関係は、この小説の本編とも位置づけられる、Jennie と Lester の関係の雛形として機能している。Brander は、オハイオ州の上院議員であり、地位も名声も財産も持ち合わせた人物である。ただし彼は、自分の属する政治という世界で重要な位置を占めながらも、もっとも重要な位置は占めていない：

People thought him [Brander] naturally agreeable, and his senatorial peers looked upon him as not any too heavy mentally, but personally a fine man (20). 社会的にそれなりの地位を占め自分に対する誇りも持っているが自己実現ができない——こうした不満は Jennie の次なる愛人 Lester にも共通して見られる。有力な新興実業家の次男である Lester は、その “sympathetic” や “charitable” な性質のために家族に、とくにその中心である父親から愛されているが (309)、ビジネスに必要な “rigidity” を欠いているため家業では兄の後塵を拝している (169)。このような Brander や Lester にとって Jennie は完璧な存在である。第一に彼女の置かれた立場それ自体が彼らの自尊心を満たす。Jennie は洗濯女という、しばしば最下層の代名詞として使われるような職業に従事する、自分より劣った立場にいる女性である。また、彼らが一目置かれている理由、「思いやりがある」という美点を、彼女ほど満たしてくれる女性はいない。彼女は救いようもない貧困の中におり、そのような貧しい女性を愛するという行為は、彼らが「思いやりのある人物」であることを証明するからである。たとえば Brander にとって、Jennie を貧困から救うという行為は、いままで理想としてきたヒューマニスティックな政治を実践に移すことである：“He felt sorry to think that such deserving people [Jennie’s family] must suffer so, but intended, also, in a vague way, to ameliorate their condition, if possible”(37). Brander は Jennie によって自分の政治の集大成ができるのである。

ただしそのためには Jennie は単に下層階級の女性であるだけでは不十分である。彼女は愛人たちに愛されるに値する女性でなければならない。しかも彼らの属する上流社会の人間とは違った意味で価値がなければならない。こうした Jennie に対する評価は、Brander によって小説の早い段階で示されている：

She [Jennie] was a big woman, basically, that he [Brander] knew. There was something there which was far and away beyond the keenest suspicion of the common herd. He did not know what it was – some bigness of emotion not altogether squared with intellect – or perhaps, better yet, experience – which was worthy of any man’s desire. (72-73、下線は筆者)

さらに Jennie の価値は、二人の愛人たちの人生の欠落部分を埋めてくれるところにもある。Brander にとってそれは若さである。52 歳の Brander はこれまで独身を通してきたが、これからの人生を一人で過ごすことを苦痛に思っている：“Fifty!” he [Brander] often thought to himself. ‘Alone –absolutely alone” (21) . そんな老後の不安にさいなまれる Brander のところに現れたのが、18 歳の Jennie である。Brander は Jennie の若さに歓喜する：“Ah, Jennie,” he [Brander] said, talking to her as he might have to a child, ‘youth is on your side. You have the most valuable thing in life” (42) . 家族を持たず孤独な Brander は、老後のために、結婚の約束によって Jennie に金銭の保証を与え、Jennie は貧困から脱却するために、若さと美しさの象徴である肉体を彼に与える。この交換が可能になるのは、二人の置かれた状況が対極にあり、それぞれの欠落項目を相手によって補うことができるからである。

次なる愛人 Lester の場合、事態ははるかに複雑で深刻である。Lester は小説に登場する際、“the son of a wholesale carriage builder of great trade distinction in that city and elsewhere throughout the country” と読者に紹介されている (126、下線は筆者)。彼は何よりもまず父親の「息子」なのである。ところが Lester は家業でもあり彼自身の仕事でもあるビジネスの才を欠くため、父親の後継者としての役割を全うすることができない。こうして Lester は Jennie の象徴する、家庭すなわち母なる世界へ逃避する。Jennie の主婦としての能力の高さは、語り手によってしばしば強調されているが、Jennie が作り出す家庭によって Lester は精神的に満たされる<sup>1</sup>：

Three years of living with Jennie had, by the every quality of the sympathetic, affectional service rendered, made him [Lester] in and affectional way dependent. Now he had been close to someone who, at odd times and at his convenience, provided him exactly the service and the atmosphere which he needed to be comfortable and happy. Who had ever been so close to him before? (214)

Lester が Jennie に母なるものを求めているのは、愛人関係において本来ならば障害と思われるような Jennie の娘 Vesta の存在が、Lester には障害となっていないところからも明らかである。それどころか、Lester は Vesta に自己投影をしている。Jennie の Vesta への母親らしい態度は Jennie の自分への態度と重なって、好ましく

映る。Lester は、Vesta を愛することで自分自身を愛し、Vesta の美点を見て自己愛を増大している。

## Ⅱ .

Jennie は、石炭を盗んだ兄の Bass を保釈してもらうために Brander に自らの肉体を与え、父親の事故によって著しい貧窮に陥りそうな家族を救うために Lester に肉体を与える。家族を助けるためという大義名分のもと、富と引き換えに男性と関係进行しているのである。しかし、貧困から脱却し生活の保証を得るのはまず Jennie 自身である。それにもかかわらず、Jennie は自分自身を、男から家族へ金を移動させる、純粋な媒介者であるとみなしている。このような Jennie の家族への態度は、彼女の愛人たちが彼女に対して取った態度と同種のものである。すなわち、Jennie は貧困からは脱出できたが、妻にはなれない。自己実現できない Jennie は、家族に金を送って自分の「無私の」精神を証明しようとしているのである。そして家族は、ちょうど Jennie が愛人たちにとってそうであったように、自分とは異なる価値を持つ存在である。この条件を満たす典型的な人物が Jennie の父親である。Jennie と違って、彼は、貧しいにもかかわらず身を落とさない。娘の援助をぎりぎりまで拒んだ父親は貧困のうちに居続け、上流階級の間とは違うドイツ流の価値観や清貧の思想を頑固に持ち続ける。それゆえ、一度は決裂したかに見えた Jennie と父親との関係は回復し、父親の死まで続くことになる。この小説において持つ者と持たざる者の間に関係が成り立つのは、前者が後者の上位にあるという認識と、後者が前者とは異なる価値を持っているという認識を、両者が共有しているときである。

したがって「下位にいる」人間がこの関係を欲するならば、自分が「かわいそうな存在」であり、それにもかかわらず「価値ある存在」であることをアピールしなければならない。それをだれよりも巧妙に行っているのが Jennie である。彼女の見事な振る舞いは、たとえば、Lester のもとをこっそりと立ち去ろうとしたときに顕著である。<sup>2</sup> そのとき書いた手紙は、ふだんはほとんど自分の意見を表に出さない Jennie がどのように問題を捉えているかを明らかにするが、それは言い

訳と自己正当化によって成り立っている：“You made me love, you, Lester, in spite of myself; Papa was sick at home that time, and there was hardly anything in the house to eat. We were all doing so poorly” (244、下線は筆者)。とくに特徴的なのは、次のように but ということばによって連結される彼女の記述パターンである：

It was wrong for me to ever have anything to do without Senator Brander, but I was such a girl then – I hardly thought what I was doing; It was terribly wrong of me to keep her [Vesta] here all that time concealed, Lester, but I was afraid of you then – afraid of what you would say and do; It can’t be right, Lester, but I don’t blame you. I blame myself; I have thought a number of times that I would try to talk to you about it [keeping relationship], but you frighten me when you get serious, and I don’t seem to be able to say what I want to. (245、下線は筆者)

このパターンは追伸にまで踏襲されている：“I expect to go to Cleveland with Papa. He needs me. He is all alone. But don’t come for me, Lester. It’s best that you shouldn’t” (245、下線は筆者)。探さないでと懇願しながら行き先を記す Jennie は、Lester が追いかけてくることを確信しているだけでない。父親の孤独を強調し、さらにその上で、自分が去るのは Lester のためであると付け加えて、自らのけなげさをアピールし、それによって Lester の心を取り戻そうとしている。Jennie は、たとえ「かわいそうな存在」によって Lester が彼自身の価値を確認していることに気づかないまでも、「かわいそうな存在」が「Lester 好みの女」であると知っており、それが異なる階級に属する自分たち二人の関係を成立させる重要な要素であるとわかっている。また Jennie は、自分と家族との関係を通じて上位者たる者の感情を理解するに至っており、下位者の控えめな隷属が上位者を支配するという力学をも修得している。彼女は「かわいそうなわたし」を、上位者たる Lester に向けて演出しアピールし、二人の関係を確固たるものにしようとしているのである。

こうした Jennie の行動パターンは彼女の人生を貫くことになる。Lester は結局 Jennie と別れて自分の帰属する世界へ戻るのだが、すると Jennie は孤児を養子にする。これもまたいままでのパターンの反復である。すなわち、「かわいそうな孤児」を支配することによる「かわいそうなわたし」の証明である。

もっとも、Jennie はこのような手練手管を最初から身に着けていたわけではない。母親の意志を継ぎ、自ら練り上げていったのである。Mrs. Gerhardt は主婦として豊かな生活を享受したいという願望を持っているが、実生活では自分の願望を満たすことができない。それゆえ、娘に自分の夢を託し、それを娘の夢として実現させようとした。このような母娘の関係は、Susan Albertine が指摘するように “triangular relationship” である：Jennie had been an ideal mother – there was an indissoluble bond of affection between them [Jennie and Vesta], just as there had been between Jennie and her own mother . . . . (378、下線は筆者)。Jennie を上院議員の Brander に結びつけるきっかけを作ったのも、そもそもは Mrs. Gerhardt である。母娘の強固な結びつきは、Lester が用意した家に引っ越しをするときの、次のような部分にも明らかである：

Mrs. Gerhardt was fairly beside herself with joy, for was not this now the realization of her dream? All through the long years of her life she had been waiting for this. Now it had come. A new house, new furniture, plenty of room – things finer than she had ever seen. (176)

Mr. Gerhardt は、あたかも、Lester と新生活を始めるのが自分自身であるかのような喜びようをしている。ただし、娘は Brander のときとは違い、もはや無知で無垢な少女ではない。自ら計画を進められるほど成長している。Mrs. Gerhardt は Jennie が Lester との関係を自分に隠していたことを責めるが、それは、娘が自分の分身であるという意識があるからである。そして、Lester からもらった 250 ドルを見せられて娘を許すのは、娘へ自分の意向が継承されていることがわかったからである。Mr. Gerhardt は、結婚の約束を得たかどうかを確認するが、Jennie は “I don’t know. . . . He [Lester] might. I know he loves me” と行って母親を不安にさせつつ、母親の助力が必要であることを訴える：“I think you’d better say something to him [Mr. Gerhardt] first,” said Jennie, “and then I’ll mention it afterward” (162) . Gerhardt 母娘の “triangular relationship” の主導権は母親から娘へと見事に移行している。

III .

Gerhardt 家の母と娘の “triangular relationship” は Mr. Gerhardt を一角としても成立する。Mr. Gerhardt は家族に貧困をもたらした主たる原因であるが、そこから抜け出すすべも持たない人物である。このような夫あるいは父親に対して母と娘は結束し貧困からの脱却を図っている。それをわかっているからこそ、Mr. Gerhardt は妻に対して次のような非難をする：

“You lie!” he [Mr. Gerhardt] exclaimed in his excitement, the painful accusation escaping him almost without consciousness on his part. “You were always shielding her. It is your fault that she is where she is. If you had let me have my way there would have been no cause for our trouble tonight.” (83)

Gerhardt 家の夫婦は、家族の究極的な問題である貧困に対して同じ解決策を持たない。Gerhardt 家の問題は貧困だけではなく、不調和でもあるのである。<sup>3</sup> そして、この夫婦の対立は、「父親」対「母親と子どもたち」という対立の構図となり、父親を孤立へと追いやっている。それを象徴するのが、Gerhardt 家で話されている言葉である。Gerhardt の英語には、ときにドイツ語が混じり、文法も心もとない。家庭ではドイツ語を使う Gerhardt に対して、子どもたちは英語で、妻はドイツ語で応えている：

“What difference?” cried Gerhardt [William Sr.], still talking in German, although Jennie answered in English. (57)

“What is this about Senator Brander coming out to call on Jennie?” he [Gerhardt] asked in German. . . . “Why nothing,” answered Mrs. Gerhardt, in the same language. (55)

Mrs. Gerhardt は、複数の民族から成る文学に登場する母親として Thomas P. Riggo が定義するような “isolated, beleaguered mother who attempts to mediate between old-world customs and the emotional need of her children” である (“Hidden Ethnic,” 54).<sup>4</sup>

Gerhardt と子どもたちの間を取り持っているのは Mrs. Gerhardt であるが、彼女亡き後は、Gerhardt は子どもたちから見放され、孤独に陥っている。<sup>5</sup> 移民家族における旧世界と新世界の混在は文化の多様性として肯定的に機能する鍵ともなるが、Gerhardt 家では、Riggio が述べるように、子どもたちの“American ways”を理解できない父親が父性を喪失している (“Hidden Ethnic” 54)。

もちろん Mr. Gerhardt は望んで貧困に陥ったわけではない。彼が希望に胸をふくらませてドイツからアメリカに移民してきたことは、子どもたちの名前からもうかがわれる。それぞれ Bass と Jennie と呼ばれる最初の二人の子どもが Sebastian、Genevieve というドイツの名前であるのに対し、後の 4 人の子どもたちの名前は George、Martha、William、Veronica であり、アメリカ社会で生きることを前提として名付けられたことがうかがわれる。ところが Gerhardt はアメリカ社会に馴染むことができず、アメリカでの豊かな生活という移民の夢を叶えることができなかつた。かつては子どもたちにアメリカ的な名前を付け、アメリカで生きる気構えていた Gerhardt であるが、孫の Vesta が誕生した際には“Wilhelmina”というドイツ的な名を提案し、彼女が長じてからはルター派の学校に行かせようともしている。<sup>6</sup> Gerhardt は晩年になってもなおドイツに軸足を置き、アメリカ社会と対立し続けているのである：

“In Germany they knew how to do these things right, but these shiftless Americans knew nothing.” (254)

“These Americans, they know nothing of economy. They ought to live in Germany awhile. Then they would know what a dollar can do.” (265-66)

Dreiser は *Jennie Gerhardt* を書くにあたって貧しいドイツ移民の家族である自分の家族の経験を基にしたと言われている。<sup>7</sup> そのような *Jennie Gerhardt* において、Dreiser が Mr. Gerhardt のドイツ性をことさら強調していることは注目すべきであろう。Dreiser の父親は、熱心なカトリック教徒だったが、Dreiser は、Mr. Gerhardt をルター派という、よりドイツ色を感じさせる宗教の信者に設定している。<sup>8</sup> ドイツ性を強調することで Gerhardt を、アメリカ化することができなかつ

た結果、富という移民の夢、アメリカの象徴を手にする事ができなかった人物として描いているのである：“he [Gerhardt] would conclude his solitary day, reading his German paper, folding his hands and thinking, kneeling by an open window in the shadow of the night to say his prayer, and silently stretching himself to rest” (99-100) .

そのような Mr. Gerhardt と対照的な人物として登場するのが、Kane の父親である Archibald である。アイルランドから移民した Archibald は、アメリカ的なやり方でビジネスを展開し、アメリカを代表する実業家に成り上がった。子どもたちの “American Way” を理解するどころか、自ら “American Way” を体現した人物である。

こうした二人の父親の違いの強調において、語り手はとくに恣意的である。Gerhardt 家の父親の名前は William であるが、Gerhardt というドイツの姓もしくは “the German” や “the old German” と呼ばれ、ドイツ人として語られている (37, 38, 83, 173, 242, 265, 344, 346, 348)。<sup>9</sup> 一方の Kane 家の父親は “the old Irishman” と呼ばれることは一度もなく、Archibald という名前もしくは “old man” や “old gentleman” と呼ばれている。ちなみに、Gerhardt が “old man” とだけ呼ばれるのは一度きりである (344)。

#### IV .

Jennie と Lester の家族は対極に位置するような家族であるが、実は、つい2、30年ほど前には同じようなところからスタートしている。彼らの父親は、ヨーロッパからのいわゆる新移民である。宗教においても二人は旧世界の伝統を守っている。二人はどちらも新世界で身を粉にして働いてきた。けれども父親がアメリカ化した Kane 家は富を謳歌し、父親がそれに失敗した Gerhard 家は貧困に喘いでいる。Jennie Gerhardt において、アメリカという国では富こそが力であり、それをもたらすのは父親である。

Lester はその象徴のような Kane 家の次男であるが、彼には富を獲得する才気が備わっていない。父なるもの、すなわちアメリカで成功するための必須要素を欠く Lester は、母なるもの Jennie との生活に逃避するのだが、それにより彼は二律背反的な立場に立たされる——家族の庇護下にいなければ経済的に満たされた生

活を送ることができない、しかし Jennie との生活を続ける限り家族の庇護下にはいられない。こうして Lester は Kane 家の「黒い羊」として日々を過ごしていくことになるが、Jennie と結婚すること（財産を失うこと）と Kane 家の一員でいること（財産を確保すること）を天秤にかけ続け、決断を躊躇し、問題を先延ばしにし続ける。傍観者的な態度で問題を先送り続ける Lester は、*Sister Carrie* の Hurstwood を髣髴させるが、Hurstwood と違って父親の庇護下にあるため、究極的な貧困へと陥ることはない。業を煮やした兄 Robert が介入すると、問題の解決ができないことを彼のせいにするほどである。Annemarie Koning Whaley は、“Dreiser wished to portray the truth about American life, including the greed and exploitation inherent in the business world. In *Jennie*, Dreiser’s best representatives of this aspect of American society are Robert and Archibald” と述べているが、Lester は父を批判することができないために、その矛先を兄へと向けているのである (71)。それは、Robert が、ビジネスにおいてだけでなく、アメリカを体現する人物としても父親の後継者すなわち「息子」であるからである。

American Way の体現者 Archibald Kane は、生きていたときはもちろん、死んでもなお一族に影響力を及ぼし続ける。彼の遺書は、Lester に Jennie との別れを決意させる唯一の力である。そして、Lester の選択が Jennie の人生を決定することを考えれば、Jennie の人生もまた Archibald Kane に支配されていることになる。さらに、*Jennie Gerhardt* という小説において読者を最後まで引っ張っている原動力が、Jennie と Lester は結婚するのか否かということであるとすれば、この小説を支配しているのは、Archibald Kane すなわち父なるものであるといえる。<sup>10</sup>

Lester が Jennie との別れを決断するのは、表向きは、Archibald が遺言で示した期限が来たためである。しかし、実は父に代わる存在——Letty——が現れたからである。かつての恋人であり、いまは未亡人である Letty は、莫大な富を司っており、Archibald に匹敵するどころか、彼をしのぐほどの成功を収めている。<sup>11</sup> Lester の人生が父なるものに支配されることで成り立っていることを考えれば、彼が新たな「父なるもの」Letty へと向かうのは当然といえよう。加えて Lester は、Letty との関係があれば、「かわいそうな Jennie」を助けずとも自分の価値を証明することができる。Letty に対する Lester の振る舞いは、あたかも Lester に対する Jennie のそれを見ているかのようなようである：

“Letty,” he [Lester] said. “You ought not to want to marry me. I’m not worth it. Really I’m not. I’m too cynical. Too indifferent. It won’t worth anything in the long run.”

“It will be worth something to me,” she [Letty] insisted. “I know what you are. Anyhow, I don’t care. I want you!” (374)

Lester は、ちょうど Jennie が「かわいそうなわたし」を Lester にアピールしたように、Letty に対して「かわいそうなぼく」をアピールしている。そして Letty もまた、Lester が Jennie に対して行ったように、上位者として「かわいそうな Lester」を欲するのである。

Lester は臨終に至って Jennie に愛を告白するという驚くべき行動に出るが、Lester と Letty の関係を考えれば、これは決して驚くべきものではない。Lester がこのような「非常識な」行動をとれたのは、彼にとって Letty が女性というよりは、父なるものだからである。

一方、Jennie が Lester の最期の愛の告白に感動できたのは、悲劇のヒロインとして自らが完成されたことをしみじみと確認したためである。もはや言い訳をしながら自分の魅力をアピールする必要も、自分の行動を正当化する必要もない。Lester の死によって、Jennie は自己を正当化する理由も対象も失ったからだ。こうして物語は終わりを迎えるのだが、しかしそこで Jennie の正当化が、語り手によって唐突になされる：“Was not her life a patchwork of condition made and affected by these things which she saw – wealth and force – which had found her unfit? She had evidently born yield, not seek” (416) . *Jennie Gerhardt* において、Lester の自己価値の欲望と Jennie の自己正当化は物語の表裏一体となっている。しかし、これほど登場人物たちが自己価値を証明しようと渴望している小説で、運命という新たな項目が終着点にされていることには違和感を否めない。主人公 Jennie は、たとえ少ない中からだとしても、自ら選択肢を選び取っている。彼女の人生は、どんな人生もそうであるように、状況に影響されてはいるものの、運命のみに翻弄された結果ではない。

なぜ Dreiser はこのような語り手のことばを物語の終わりに用意したのであろうか。考えられるのは、自ら作り出した枠組みに則りながら小説を書いてきた Dreiser が、その枠組みを越えようとして足を取られてしまったのではないかとい

うことである。

Dreiser は前作 *Sister Carrie* で、主人公の欲望を物語の促進力として小説を紡いでいる。この作品において彼は、登場人物たちの富への欲望というダイナミズムによって、初期資本主義という大きな枠組みを描いた。すなわち、モノやお金といったことがらを細々と提示し、登場人物たちとそれらの関係を詳細に描くことで、時代を浮かび上がらせそこに生きる人間を描くという形を生み出した。いわば登場人物たちが小説を作り上げるという形を作り上げたのである。一方 *Jennie Gerhardt* という小説においては、登場人物が小説を作り上げることはない。なぜなら、ここでの大きな枠組みである身分あるいは階級は登場人物たちの外側に最初から規定されているからである。登場人物たちはその内部で動くのみであり、小説はその枠組み内で書かれ読まれる。しかし、それにもかかわらず Dreiser は、*Jennie* や *Lester* の自己弁護や自己正当化をこの小説を展開させるような原動力と見なしてしまったのではないだろうか。というのは、物語の進展にときに強引さが見えるからである。たとえば、*Vesta* や *Letty*、*Jennie* の両親や兄弟といった脇役たちはあまりにもタイミングよく登場したり、死んだり、いなくなったりする。小説の構造が、登場人物の自己弁護や自己正当化と二重写しになって見えるのである。もちろん *Jennie* に降りかかる一連の出来事は *Jennie* という人物を中心に据えることで連続性と包括性を持ち得ており、物語を一貫させている。ただし、それはあくまでも人物たちが動いている小説の内部のことであり、小説の構造とは別の次元の話である。いくら *Jennie* が選択をしようと自己正当化をしようと、それは小説の枠組み内においてであり、彼女が *Sister Carrie* の *Carrie* のように小説を作り上げる原動力になることはない。それを考えると、物語の最終地点における運命という項目の導入は、作者自身によるその矛盾の吐露であるとも解釈できる。先の引用は *Jennie* の人生について述べたものであるが、これを彼女の人生ではなく小説の枠組みに置き換えてみると、あたかも Dreiser が自己弁護をしているかのように読めはしないだろうか：“She had evidently born yield, not seek. This panoply of power had been paraded before her since childhood. What could she do now but stare vaguely after as it marched triumphantly by?” (416-17). ここでの *Jennie* は、作者 Dreiser と入れ替わったようでもあり、作者 Dreiser が自ら作り上げた小説の構造の中から出られない自身を見、多少の自己正当化を試みているようにも思えるのである。

【Notes】

- 1 Lester の母親は、嬉々として家族の面倒を見るような、いわゆる家族的な母親ではない：“His mother loved him [Lester], but she was always a socially ambitious woman whose attitude toward him had not so much to do with real love as with ambition” (214) .
- 2 いつ「こっそり立ち去る」のがよいのかわかっていて、それを実行するのも Jennie の天賦の才といえる。もちろん彼女がこれを行うのは、隠し通してきた Vesta の存在が露呈したときである。
- 3 Judith Kucharski は Jennie と Lester の違いを “Lester cannot live with his confusion and uncertainty and Jennie can” と指摘しているが、それは、Jennie の家族がそもそも混乱や不安定な状態にあり、Lester の家族がそうでないからである (21)。
- 4 Jennie Gerhardt の母親たちを語り手が名前では呼ぶことはない。彼女たちは個としてではなく、夫や子どもたちとの関係性から語られているのである。Mrs. Gerhardt は家族の不和や貧困を、Mrs. Kane は調和と富を象徴する記号である。
- 5 そんな彼を救い、彼の死まで看取るのは、6 人の子どものうち Jennie ただ一人である。この小説の「母親」が父親と子どもたちの仲介者であることを踏まえれば、このエピソードも Jennie が精神的に「母親」であることを示している。
- 6 Gerhardt 家の第三世代である Vista はもはやドイツ語を解さないため、さすがの Gerhardt も Vesta には祈りのことばを英語で教えている。
- 7 たとえば、James L. West は “almost all of the major and minor characters are versions Dreiser family members or people Dreiser had known” と述べており (West, “Introduction” viii)、Paul Giles は小説全体が Dreiser 家で話されているドイツ語から英語への翻訳であるという興味深い指摘を行っている (56)。Jennie のモデルになっているのは Dreiser の姉の May Frances で、彼女は年上の男性と関係を持ち妊娠し、のちに裕福なアイルランド系の男性と、男性の家族から受け入れられないまま、長く同棲を続けた。Vesta の印象が一貫して薄いのは、モデルの不在という理由も大きいだろう。小説化するにあたって事実を変えたという点では、最初の男性との関係の終わり方にも注目すべきである。Frances の妊娠は死産に終わったが、小説では Brander は急死し、Jennie は娘を産んでいる。若さと経済的安定という Jennie と Brander の交換関係は自己充足してしまい、物語をドラ

マティックに展開する可能性に乏しい。また、家族を持たない Brander との関係だけでは、アメリカの家族というこの小説の重要な要素の一つが単調な展開になってしまう。さらに、次なる男性 Lester が Jennie の母性に惹かれるのには、Jennie に娘がいることは好都合である。Jennie Gerhardt においては、Brander が死に、死んだ後で Jennie の妊娠が発覚するという、この二人の関係が生み出すであろうと考えられる最大の悲劇が順序よく与えられているのである。

- 8 Richard Lempp によれば、“Luther, the greatest of heroes in the eyes of the majority of Germans, is insulted in the Catholic press and schools as the greatest of criminals” (100) . Dreiser の父親は、苦しい家計の中から子どもたちをカトリックの学校に学ばせるほど熱心なカトリック教徒だった。Riggio は、少年時代に厳しいカトリック教育を受けたことも Dreiser ののちのカトリック批判につながっていると述べる “Biography”。
- 9 敬虔なルター派の信者である Gerhardt が “Calvin type of face” を持ち、William という名前を持っているのは Dreiser のユーモアであろうか (82)。
- 10 その点において小説のタイトルは示唆的である。この小説の主人公は、“Genevieve” というドイツ名で登場するが、その後は一貫して Jennie というアメリカ的な (アングロサクソンの) 名前で語られる (5、6、7)。Jennie Gerhardt は母親の精神や価値観すなわち移民一世の精神や価値観によって Lester を魅了するが、結局 Mrs. Kane というアメリカの妻にはなれず、Gerhardt という旧世界の名前のまま一人アメリカで生きる。
- 11 Robert H. Elias が指摘するように、Letty は “sophistication, artistic talent and intellectual endowment” も備えており、これらはすべて Jennie に欠けているものである (6)。

#### 【Works Cited】

- Albertine, Susan. “Triangulating Desire in *Jennie Gerhardt*.” *Dreiser’s Jennie Gerhardt: New Essays on the Restored Text*. Ed. James L. West III. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1995. 63-74.
- Casciato, Arthur. D. “How German is *Jennie Gerhardt*.” *Dreiser’s Jennie Gerhardt: New*

- Essays on the Restored Text*. Ed. James L. West III. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1995. 167-82.
- Dreiser, *Jennie Gerhardt*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1992.
- . *Sister Carrie*. Edited by John. C. Berkey, Alice M. Winters, James L. W. West III, and Neda M. Westlake. Philadelphia: U of Pennsylvania Press, 1981.
- Elias, Robert H. "Janus-Faced *Jennie*." *Dreiser's Jennie Gerhardt: New Essays on the Restored Text*. Ed. James L. West III. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1995. 3-8.
- Giles, Paul. "Dreiser's Style." *The Cambridge Companion to Theodore Dreiser*. Eds. Leonard Cassuto, Clare Virginia Eby. Cambridge: Cambridge UP, 2004. 47-62.
- Kucharski, Judith. "Jennie Gerhardt: naturalism Reconsidered." *Dreiser's Jennie Gerhardt: New Essays on the Restored Text*. Ed. James L. West III. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1995. 17-26.
- Lempp, Richard. "Present Religious Condition in Germany." *The Harvard Theological Review* 3.1 (1910): 85-124. Web. 3 Sep. 2013.
- Riggio, Thomas P. "Biography of Theodore Dreiser." *Dreiser Web Source* University of Pennsylvania Library. 2000. Web. 3 Sep. 2013.
- . "Theodore Dreiser: Hidden Ethnic." *Melus* 11.1 (1984): 53-63.
- West, James L. W. III. Introduction. *Jennie Gerhardt*. By Theodore Dreiser. Philadelphia: Pine Street Books, 2006.
- Whaley, Annemarie Koning. *The Trouble with Dreiser: Harper and the Editing of Jennie Gerhardt*. Cambria Press, 2009.